

テキストの結束性の記述 — 「辞書は新しいのがいい」構文の主題 X 名詞句に注目して— 石原佳弥子

本発表は語彙・統語的な要因によって維持されているテキストの結束性の記述を目指し、野田尚史(1996)『「は」と「が」』(くろしお出版)が「XはYがZ」構文の下位分類の1つとする「辞書は新しいのがいい」構文の〈選択型〉〈並列型〉の2つの型3つのタイプの用例を現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下「BCCWJ」と呼ぶ)より抽出し、この構文のX名詞句を中心に考察を行った。「辞書は新しいのがいい」構文では〈選択型〉〈並列型〉とも先行詞を持たない間接照応において庵功雄(2007)『日本語におけるテキストの結束性の研究』(くろしお出版)が統語的問題から必須項を持つ1項名詞と呼ぶ名詞を主題とし、その必須項をテキストの大きなtopicとすることによってテキストの結束性が維持されていることがわかった。その場合、述語はていねいさ、テンス、モダリティ(名詞文では判定詞も含む)などが表層に現れず言い切り形となっていた。また〈並列型〉ではこの1項名詞が主題となった文が連続して現れて大きなtopicの下で小さな情報を付加していた。清水佳子(1995)「「NPハ」と「 ϕ (NPハ)」」(『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版)は、属性叙述文は1文で完結性が高いので1つの主題の下に複数連文するには主題の省略や顕現だけでない手段が必要と指摘しているが、「辞書は新しいのがいい」構文〈並列型〉では間接照応にある1項名詞の主題Xが複数の属性叙述文の連文を可能としていることがわかった。

また、Xが前文脈に先行詞を持たず照応関係にもない「辞書は新しいのがいい」構文の用例が新書で見られた。この用例のX名詞句は福田嘉一郎(2016)「主題に現れうる名詞の指示特性と名詞述語文の解釈」(『名詞類の文法』くろしお出版)が「任意」と呼ぶ、書き手自身が指示対象を特定する意思がない名詞句となっており不定の総称名詞と解釈するのが適当と考えられる。このような文はテキストの結束性を維持せず文脈の流れを一度遮断することで背景的知识を解説する文、つまり、脚本のト書きや論文の注釈のような役割を担っていると本発表では結論づけた。